

音楽科教員養成課程における 教科専門科目のあり方に関する一考察

— 学生の意識に着目して —

大野内 愛

(2021年10月5日受理)

A Study of Specialized Subjects in the Music Teaching Training Curriculum:
Student Teachers' Consciousness

Ai Oonouchi

Abstract: At present, there is a need for the integration of subject specialization and education in the teaching training curriculum in Japan. Some universities have already reported on the practice of classes that integrate subject specialization and education. In this study, I first surveyed the student teachers to understand their consciousness and discover: First, what they are learning in the specialized subjects, and second, how they want to apply the knowledge to their musicology teaching practice. Based on the results, I examined how to capitalize on the characteristics of specialized subject teachers in the classroom. The results show that specialized subjects should play the following roles: First, to pass on performance techniques and teaching methods to students for improved classroom practice. Second, and more importantly, teachers of specialized subjects need to use their characteristics as performers to communicate what music is through words, performances, and attitudes, and to engage the student teachers in dialogue.

Key words: music teaching training curriculum, specialized subjects, technical subjects, trial lessons

キーワード：音楽科教員養成、教科専門、実技科目、模擬授業

1 はじめに

2015（平成27）年12月の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、「教職課程については、学校種ごとの特性を踏まえつつ、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」等の科目区分を撤廃し、新たな教育課題等に対応できるよう見直す」（文部科学省2015, p.31）とあり、その後2019（平成31）年度に開始された新しい教職課程では、「大きくくり化」として「教科及び教科の指導法に関する科目」が新設された。これは従来の教

職課程において課題とされていた、教科専門および教科教育の連携を目指した教育内容の再検討が求められていることを示している（多賀2021, p.169）。この流れの中で、これまで教科専門と教科教育の融合を目指した実践的研究が進められている。

小坂ら（2019）は、島根大学教育学部で導入されている、教科専門科目と教科教育の融合を図る「教科内容構成研究」授業について、現状と課題を示した。教科の専門性を、学校教育における授業内容や教育・指導実践にどのように関連付け、反映させるかという視点において、音楽科では基礎知識や技能の不十分さが

指摘された (p.25)。河邊ら (2018, 2019) は、教科教育担当教員と教科専門担当教員の協働により実施している「音楽科教育法Ⅱ・Ⅳ」について、教材の音楽的解釈を試みる実技指導が、学生の教材研究力の向上に一定の効果をもたらしていることを明らかにしている (河邊ら2019, p.121)。鈴木ら (2018) は、教科専門教員 (声楽) が中学校の音楽科授業にゲストティーチャーおよびアドバイザーの立場で参加し、そのことが教科専門教員と音楽授業担当教員相互にどのような影響を及ぼすのかを明らかにした。教員養成における教科専門の授業においては、技能習得における方法論と理論的背景を扱うこと、学生の表現力を高めるとともに、演奏や言葉による表現方法を学ばせることなどの必要性を示した (pp.467-468)。これらの研究はいずれも、学生の授業力の向上に向けた教科専門担当教員の課題に着目しており、教科教育を充実させるための教科専門のあり方を考察している。

確かに、教科専門が教員養成における科目であるからには、教科教育の充実寄与すべきである。しかし言うまでもなく教科専門担当教員は、音楽科授業を実施するためのスキルを伝えることだけが役割ではない。筆者は、教科専門 (声楽) および、教科教育の担当教員であり、中学校での教員経験をもっている。常日頃、教科専門の授業においては、学生が音楽科授業の実践に繋げられるようなアドバイスをしよう心掛けている。反面、教科教育の授業において学生の模擬授業を見ていると、授業の進め方はよく学んでいるが、その根底にある音楽そのものへの理解や情熱が乏しいと感じる。教科専門と教科教育の両方を担当する中で、学生に足りないのは、方法論ではなく音楽とは何かという本質的な部分ではないかを感じるのである。

菅 (2016) は、宮崎大学教育文化学部音楽科に所属する学生および教員にアンケート調査とインタビュー調査を実施し、「実技科目を通じて、音楽の芸術的な本質や音楽家としての倫理観や使命感を育てようとしている教員の意識と、授業に直接役立つスキルや指導法のみを音楽科教育の領域に持ち込もうとしている学生の意識との間には、ずれがあること」(p.5)を明らかにしている。そもそも教科専門担当教員は、知識や演奏スキルだけでなく、学生が音楽科授業を実践するために基礎となる、音楽の本質や情熱を培う授業を展開していることが示された。多賀 (2021) は、新設された「教科及び教科の指導法に関する科目」における「器楽」の授業と、近接領域とを連携させるための可能性を探った上で、まとめとして、「教員養成課程における器楽をはじめとした実技を伴う教科内容が、質や完成度の高さを犠牲にしてよいということを必ず

しも意味しない。むしろ質の高い演奏を追求しつつ、養成課程においては学修する他の科目との融合を図りながら、音楽を総合的にとらえる力量を習得させる必要があるのではないか」(p.176)と述べている。これらは、教科専門担当教員として共感する部分が多い。また河邊ら (2020) は教科教育の立場から、教科専門担当教員の「音楽を語る言葉」について「声による表現の特性、管楽器の演奏技術、作曲家の内面に迸る情熱など、各教科専門担当教員が履修者を前に語る言葉から、教材の本質を理解するのみならず音楽そのものをも享受することができる。筆者はまさしく今ここにその音楽が流れているような、自分と音楽との距離が縮まっていくような感覚を覚えることがあった」(p.205)と述べ、その意義を捉えている。教科専門担当教員は演奏家だからこそできる言葉での表現があると言える。

では実際に、学生は教科専門科目において何を学び、音楽科の授業実践にどのように活かしていきたいと感じ、実際にそれが実現できているのだろうか。本稿では、学生への意識に焦点を当てながら、新教育課程における「教科および教科の指導法に関する科目」として教科専門担当教員の特性を活かした授業のあり方を考察することを目的とする。

2 調査の方法

2.1 調査概要および対象

筆者が担当している広島大学教育学部3年前期の選択科目「音楽科実践論」では、教育実習を想定して履修者全員が50分間で中・高対象の模擬授業を実施する。令和3年度の履修者18名を本調査 (調査1・2) の対象とする。なお対象者は全員、2年次にて約15分の模擬授業の経験がある。

本調査 (調査1・2) において「実技系の授業」と呼んでいるのは、声楽、合唱、ピアノ、管弦打楽器、日本音楽、作曲、オーケストラ、吹奏楽、オペラ実習の授業である。

<調査1>

学生が模擬授業を考えたり、実施したり、観察したりする中で、教科専門の授業で学んだことをどのように活かしているのかを調査するため、毎回授業後にWebアンケートフォームにてインターネット上に質問内容を公開し、記名による回答を依頼した。質問内容は「授業を作っていく上で、実践していく上で、また観察した授業について協議する中で、参考になった実技系の授業内容はありますか。授業の内容や音楽に関する理論的な内容、その他教員からの世間話や、実

技授業の中での友達とのやりとり、演奏の中で感じたことなども含まます」とした。

<調査2>

調査1の結果を受け、筆者は「音楽科実践論」の最終回にて、菅（2016）の論文を資料とし、教科専門担当教員と学生の意識にずれがある可能性を学生に示した。その上で、学生には記名による紙面上でのアンケートを実施し、後日回収した。質問内容は次の2点である。「(1) あなたは実技系の授業で、テクニック以外の部分においてどのようなことを学んでいますか。具体的に書いてください。(2) (1) を踏まえつつ、今回の自分の模擬授業をどのように改善することができますか。具体的に書いてください。」

2.2 分析方法

調査1・2とも、学生の記述内容をもとにKJ法による分析を行なった。なお、調査2については、記述されたテキストを切片化した上で分析した。

3 結果と考察

3.1 調査1：教科専門の授業から模擬授業の検討に活かされたこと

学生には毎回の授業後に回答させたため、回答の総数は127であった。その記述内容をKJ法により分析した結果、「知識・スキルに関すること」「経験に関すること」「音楽の本質の本質に迫ること」の3つに分類することができた。それぞれの回答数は図1の通りである。

「知識・スキルに関すること」は25件であり、その内容は、ドイツ語の発音や、発声の仕組み、スコアの読み方、和楽器と雅楽の知識などであった。「経験に関すること」は14件で、模擬授業で扱う曲そのものを自分が演奏した経験、オーケストラで扱う楽器を演奏した経験などが含まれる。「音楽の本質に迫ること」は1件のみであったが「音楽とは愛することを学ぶこと」という記述であった。特に思いつくものがない場

合には「なし」と回答することを許していたが、結果としてこれが最も多く、87件であった。本来なら声楽や器楽で培った演奏スキルが活かされると想定されるが、今回はコロナ禍ということもあり、学生が実施した模擬授業の2/3が鑑賞領域であったことも、この結果につながっていると考えられる。とはいえ、87件が「なし」と回答したことは憂慮すべきことである。

この結果から、菅（2016）が示すように、学生は教科専門の学習内容の一部しか教科教育の文脈につなげられていないことが再確認された。

そこで筆者は、学生が教科専門の授業から学んだことをどのように認知しているのかを調査することとした。

3.2 調査2（1）：教科専門の授業における演奏スキル以外の学びの認知

教科専門の授業において演奏スキルを学んでいることは当然であるため、ここでは演奏スキル以外の学びについて回答させた。分析の結果、以下の4つのカテゴリーに分類することができた（カッコ内は記述した人数）。

表1 教科専門の授業における学びの認知

カテゴリー	具体例（人数）
楽曲へのアプローチ方法	・知識の重要性（9） ・新たな曲へのアプローチ（5） ・楽譜を読むスキル（3） ・音楽の聴き方（2）
音楽の本質に迫るもの	・音楽とは何か（6） ・音楽の楽しさ、美しさ（6） ・音楽の意義（3） ・音楽との向き合い方（3）
自分自身の人間的成長	・協調性（4） ・価値観の形成（4） ・自分自身を知ること（3） ・自主性（2）
教師としての姿	・教師としての指導法（3） ・音楽家としてのあり方（2）

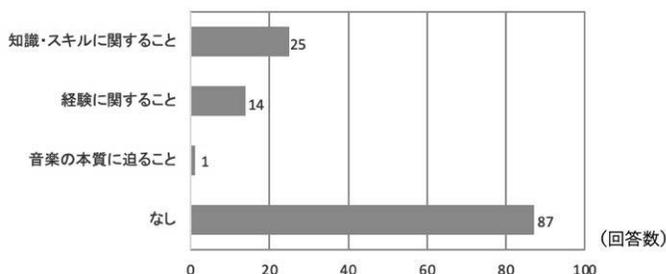


図1 教科専門の内容で模擬授業の検討に活かされたこと

「楽曲へのアプローチ方法」では、特に知識の重要性について9名の学生が回答していた。作曲家や時代背景、演奏する楽器の歴史など、演奏する上での関連する知識の重要性を多くの学生が学んでいる。「音楽の本質に迫るもの」としては単に演奏することの楽しさを回答しているものもあったが、音楽の美しさや、私たちはなぜ音楽をするのかなど、音楽の存在意義や音楽とは何か、ということ学んでいると認識している学生もいる。「自分自身の人間的成長」として、演奏を通して自分自身を見つめ直すことや、他者とのアンサンブルをする場合に協調性を学ぶことができていると回答している。「教師としての姿」では、指導者の指導方法や音楽家としての姿勢、態度、情熱などを学んでいる。

教科専門の授業では、オーケストラや吹奏楽、合唱などアンサンブルを中心としたものもあるが、声楽、ピアノ、管弦打楽器については個人レッスンの形式であり、演奏スキルの指導が中心であると思われる。しかしその中で学生は、楽曲へのアプローチ方法は当然のことながら、自分自身の人間的成長を感じるとともに、音楽とは何かという本質的なことを学んでいることが明らかとなった。

3.3 調査2(2)：自分の模擬授業の改善点

学生には、教科専門の授業で学んでいることを再認識させた上で、自分の模擬授業の改善点を考えさせた。記述内容をKJ法で分析した結果、「教師としての振る舞い」「教材研究の充実」「授業内容の改善」「授業方法の改善」「感性をもっと働かせる授業」「音楽の本質に迫る授業」の6つのカテゴリーに分類することが

できた。それを下記の図に記す(カッコ内は記述した人数)。

まずは「教師としての振る舞い」に関する回答があり、これは授業内容や授業方法以前に、人前で話をすることに課題をもつ学生によるものであった。また、「教材研究の充実」を挙げている学生も多く、自分自身が扱う楽曲についての知識を増やすことはもちろんのこと、それらの楽曲の良さを授業者自身が感じ取る必要性を述べていた。これをもとに、「授業内容の改善」「授業方法の改善」が非常に多く挙げられた。ここに含まれていることは、音楽科に限らず授業実践において課題となる点である。その他「感性をもっと働かせる授業」、さらには「音楽の本質に迫る授業」へ改善していきたいという思いを述べている学生も複数存在した。

回答人数で考えると、「授業内容の改善」「授業方法の改善」について記述した学生は非常に多く、授業としての「形」に囚われている様子が見て取れる。前述したとおり、筆者は学生の模擬授業を観察し、その課題は授業の「形」ではなく、その根底にある音楽そのものへの理解や情熱の乏しさであると感じている。図2で言うなら、「感性をもっと働かせる授業」「音楽の本質に迫る授業」の部分をより改善してほしいと願っている。しかしながら、学生の多くは「形」に囚われ、自分の模擬授業の改善点は「形」であると述べているのである。

3.4 教育実習での学生の授業の観察から

筆者は、「音楽科実践論」の授業が終了した後に実施された教育実習の様子をいくつか参観し、学生が模

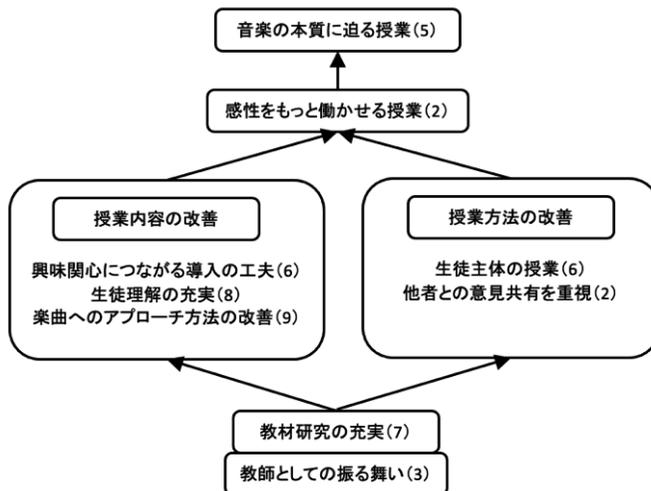


図2 模擬授業の改善点

模擬授業の課題を踏まえてどのように授業をしているのかという視点で観察した。ここでは、自分の模擬授業の改善点として「感性をもっと働かせる授業にしたい」と回答したAさん、そして「音楽の良さや美しさを見出すという視点を重視したい」と回答したBさんの授業について述べる。

Aさん、Bさんともに同じ附属中学校での実習であったため、扱う楽曲や対象学年に違いはあるが、その方法には類似点も多かった。どちらも鑑賞の授業で、題材の中で最後の授業（4時間目 / 4時間中）であった。2名の授業の流れは次のようなものである。

- ①前回までの復習をする。
- ②楽曲を鑑賞し、気づきをメモする。
- ③グループで気づきを共有する。
- ④これまでの学習を踏まえて個人で批評文（紹介文）を書く。

どちらの授業も生徒たち1人に1台ずつ配布されているタブレット端末を使用したり、パワーポイントを使っている授業進行をしたりするなど、ICTを効果的に活用している様子が見られた。また、生徒の反応もよく、意欲的に意見共有をする場面もあった。最後の批評文（紹介文）を書く場面では、全員が真剣にプリントに向かう姿勢が印象的であり、書かれている内容としては、楽曲の情報だけでなく、音楽を形づくっている要素に着目しながら楽曲を紹介するものであった。

しかしながら、この附属学校では、日頃から鑑賞したあとに批評文（紹介文）を書くことが定着しており、この流れに生徒たちが慣れていることも、よく書けていた原因であろう。

この2つの授業を参観して、筆者の主観として、模擬授業の時よりも「教師としての振る舞い」「授業内容」「授業方法」という3点については改善ができていたと感じる。授業実践後の協議会においても、指導教員や実習生の仲間達から「スムーズに授業が進んでいた」という評価を得ていた。しかしながら、音楽科特有の「感性をもっと働かせる授業」「音楽の本質に迫る授業」には到達していないと感じた。Aさん、Bさん共に、自分の模擬授業の改善点としてこれらのことを挙げていたにもかかわらず、つまり自分の授業の課題として認知していたにもかかわらず、それが改善できなかったということになる。もちろんこの2つのことは一朝一夕に達成できることではないが、「感性をもっと働かせる授業」や「音楽の本質に迫る授業」にするための働きかけが授業には見当たらなかったということである。

3.5 課題

調査および、教育実習での授業観察から、次のような学生の課題を見出すことができた。

1つ目は、教科専門の授業と教科教育の授業では、楽曲に対するアプローチに差があるということである。教科専門の授業において「楽曲へのアプローチ方法」を学んでいると多くの学生が認知しているにもかかわらず、模擬授業の改善点として「教材研究」を多くの学生が挙げている。学生は、教科専門の授業においては扱う楽曲の背景や時代を調べ、さらに楽譜から簡単な楽曲分析をしていくことの重要性を理解し、楽曲へのアプローチのためのスキルを学び、習得している。しかしながら、教科教育の授業ではそのスキルを活かして教材研究することができていないということが言える。

この要因に関しては、すでに先行研究でも指摘されている。菅（2016, p.5）はその要因を「①ワークシート型楽曲分析によるパターン化した授業の助長」「②教科教育担当教員と実技担当教員の分業意識」としている。

2つ目は、音楽科ならではの「生徒の感性を揺さぶったり本質に迫ったりする授業の方法」を知らないことである。もしくは感性が揺さぶられる経験や音楽の本質について考える経験に乏しいとも言える。学生は「音楽の本質に迫るもの」を教科専門の授業から学んでいると認知しており、「自分の模擬授業について「感性をもっと働かせる授業」「音楽の本質に迫る授業」にしていきたいと考えていても、実際の授業実践では、生徒に対してそれを仕掛けることができていない。感性を揺さぶり、本質に迫る授業をするためには、授業者の意図をもった語りかけが必要不可欠と言える。しかし、教育実習での授業実践では授業者の発言自体が非常に少なかった。生徒は確かに自由に活動し、自由に思考しているが、そこに授業者側の意図が感じられなかったのである。これは、学生からの模擬授業の改善点の中で「生徒主体の授業にしていきたい」という記述が多かったことが関連しているとも考えられる。学生はこれに関して、模擬授業では「自分ばかりが説明してしまった」「教師である私が教えたい・話したいことを中心に考えてしまった」という記述をしている。生徒主体にするためには教師は語ってはいけないというように、偏った理解をしている可能性がある。

4 教科専門科目のあり方とは

前述したとおり、近年は教科専門と教科教育の架橋が求められ、先行研究では教科教育の授業に教科専門担当教員が入っていく実践報告も多い。学生の授業実践に対し、教科教育と教科専門の両方の立場から指導ができることは非常に魅力的なことである。河邊ら(2020)が述べているように、演奏家としての一面をもつ教科専門担当教員の語る言葉には力があり、その語りの中に音楽の本質に迫るものがある。そうした教科専門の担当教員による指導は、特に実技指導の中において、実際の演奏とともに語られることが多い。学生の記述の中に以下のようなものがあった。

「レッスンでは、テクニックの指導以外の先生との対話をとおして、音楽とは何か、私たちはなぜ音楽をするのか、人はなぜ恋をするのかなど様々なことを考えることで、それをどう音楽で表現するかを学んでいる。先生の話を聞くことで、音楽との向き合い方を知ることができ、テクニックを教えてもらうだけでは得ることのできない表現力や、気持ちを身につけることができるようになる」

「レッスンでは、言葉で表現することのできない「音楽」という芸術とは何かを演奏で教えてもらっている。(中略)教師の模範演奏はテクニックの獲得だけでなく、各々の「芸術観」を確立させるのに役立つ」

「音楽と共に生きている者、音楽を愛する者は、音楽をツールとしてではなく、まるで生き物のように扱っていると感じる。(中略)そんな姿勢を私に教えたり、または言葉では言わずとも、その背中で見せてきてくれたりしたと感じる。(中略)何十年と音楽と共に歩んできた先生方の音楽への愛の深さや重さから「音楽への向き合い方、音楽との歩み方」を伝え続けてきてくれたと考える」

こうした指導は、実技指導の中でこそ見えるものである。また学生が、その教員と同じ楽器を専門としていからこそ、言葉でなく演奏やその姿から学ぶことができる可能性がある。教科専門と教科教育が融合することによって得られる効果もある一方、それらが別々に実施されているからこそ得られる効果もある。つまりそれは純粋に、演奏の指導を通した、音楽そのものへのアプローチである。

教科専門科目は、学生のより良い授業実践につながるテクニックや指導法を伝えていく役割を担うべきで

あることももちろん、そうした科目を担当する教員は、演奏家としての特性を活かし、言葉、演奏、姿で音楽とは何かを伝え続け、さらには学生と対話し続ける必要があるのではないだろうか。

5 おわりに

本稿の調査1の段階では、学生が教科教育において教科専門での学びを部分的にしか援用していないことが明らかであった。したがって筆者は、菅(2016)による先行研究を用いて、学生に対し「教科専門の授業で学んでいることは知識やテクニックだけなのか」と問いかけた。このことにより調査2のような学生の記述が出てきた。

先行研究でも明らかになっているように、学生は教科専門と教科教育を別の文脈で捉える傾向にある。しかし、少しの働きかけがあれば学生は自分の中でそれを繋げていこうとする力をもっていることがわかった。こうした働きかけが、学生にとって教科専門と教科教育の架橋となっていくのではないだろうか。

引用・参考文献・Web資料

- 河邊昭子・草野次郎・河内勇(2018)「教科教育と教科専門の協働による「音楽科教育Ⅳ」の授業改善の試み—創作分野と器楽指導に関して—」『兵庫教育大学研究紀要』第53巻, pp.169-179.
- 河邊昭子・木下千代・野本立人・河内勇(2019)「教科教育と教科専門の協働による「音楽科教育法Ⅱ」の授業改善に関する一考察—歌唱分野に関して—」『兵庫教育大学研究紀要』第55巻, pp.121-132.
- 河邊昭子・草野次郎・野本立人・河内勇(2020)「教科教育と教科専門の協働による「音楽科教育法Ⅰ・Ⅲ」の授業改善に関する一考察—大学教員の課題意識に着目して—」『兵庫教育大学研究紀要』第56巻, pp.195-208.
- 小坂達也・佐々木直樹・藤田英樹・小谷充・川路澄人・境英俊・西村覚・原文貴(2019)「芸術・実技系教科における実践的教育活動の現状と課題」『鳥根大学教育学部紀要』第52巻別冊, pp.24-34.
- 菅裕(2016)「音楽科教員養成における「教科に関する科目」と「教職に関する科目(各教科の指導法)」の融合—教科教育担当教員と教科内容担当教員の連携の課題—」『宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要』第24号, pp.1-8.
- 鈴木愛美・中村正之・伊野義博(2018)「教科専門教員との協働による音楽授業—中学校音楽科における

歌唱の授業実践からー』『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第10巻第2号, pp.461-470.

多賀秀紀 (2021) 「中等音楽科教員養成課程「器楽」の内容構成に関する一考察ー木管五重奏への編曲作品の楽曲分析に基づいてー」『富山大学人間発達科学部紀要』第15巻第2号, pp.169-177.

文部科学省 (2015) 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について (答申)」
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (2021年9月19日確認)